

# 草原新聞

第5号

平成20年2月  
発行

## 広がる「ボランティア」の活動 ～みんなで参加、草原の維持管理～



消火作業に使う火消し棒を手に作業現場に向かう野焼き支援ボランティア。  
火消し棒は、主に竹とかざら、もしくはスギの枝を利用する。

阿蘇の草原を維持しているためには、野焼きや採草などを継続していく必要があり、そのためには多くの人手が必要です。近年、高齢化や後継者不足などにより人手の確保が困難になる中、草原の維持管理作業を支援するボランティアの活動の輪が広がりを見せています。

財団法人阿蘇グリーンストックは、平成一〇年度に野焼き支援ボランティアを組織し、研修を受けた都市の人々を牧野組合などが行う野焼き・輪地切り作業に派遣しています。平成一八年度は、延べ一八〇〇人近くを派遣し、阿蘇草原再生の取り組みの一つである、長年管理を放棄している牧野の野焼き再開においても、地元関係者・消防団などと共に欠かせない

い戦力となっています。地元農家からは、「人手不足が解消されて助かる」、「ボランティアの勇姿に刺激を受ける」という声も聞かれます。また、阿蘇地区パークボランティアの方々は、草原環境を守るために盗掘防止パトロールや、草原の維持管理手法の試験などを担っています。

他にも、草原を守っていくための理解者を増やし、応援者を増やすために、国立阿蘇青少年交流の家と環境省が協働で草原環境体験学習プログラムを実施しています。これは野焼きや輪地焼きなどを体験し、阿蘇の草原環境について学ぶものです。この企画を通して、参加された方々が今後、ボランティアなど様々な形で活躍される事を期待しています。

### 草原を学ぶ『子どもパークレンジャー』

環境省のレンジャー（自然保護官）は国立公園のパトロールや動植物の調査・保全活動、自然とのふれあい活動、公園利用者の指導などの活動を行っています。子どもパークレンジャーは、子どもたちがレンジャーたちと一緒に活動をしながら、自然保護の大切さや自然とのつきあい方を学ぶものです。

阿蘇地域では平成十九年一〇月二〇日、小学生九名を対象に活動を実施しました。草千里でゴミ拾いや利用者へ自然景観を守るための呼びかけなどを行ったり、永草牧野に入らせてもらい、牧野組合長らの指導のもと、草小積みづくりを体験したり、一日通してがんばりました。



### 風物詩

#### 「周年放牧」

阿蘇では、冬は畜舎で牛を育てるのが伝統的な飼育形態ですが、最近では冬でも放牧する「周年放牧」が見られます。「寒くてかわいそう」という意見もあったようですが、牛たちは自然の中でストレスをためずにのびのびと育っています。飼育作業の負担や生産コストの減少がメリットです。



